「主体的・対話的で深い学びのある道徳の授業を目指して」

淡路市立津名中学校
教諭　中尾　昌二

１　取組の内容・方法

（１）はじめに

平成４年に採用していただき、教師生活もはや２６年が過ぎようとしている。英語教師としていつも、「生徒の学習意欲を向上させるには」、「コミュニケーション能力をつけさせるには」と考え、日々試行錯誤しながら取り組んできたが、道徳教育に関してはどうであったか。毎回自信を持てず取り組んでいた道徳の授業であったが、ある研究授業がきっかけで、気持ちに変化が表れてきた。「生徒と一緒に考えを深めていく楽しさ」や、「生徒たちのそれぞれのしっかりとした思いや意見」に触れたことで、これ以降、生徒と一緒に考える、楽しく深め合える道徳の授業づくりを目指して取り組んだ。

（２）ロールプレイからいじめ問題を考える

道徳の研究授業に向けて、どのようなテーマで授業をするのか学年会で話し合った。その中である先生より、いじめをテーマに授業を考えるのはどうかと提案があり、生徒にとっても身近な問題であり、教師と生徒がお互い一緒になって考えることができる教材として１冊の絵本の紹介があった。タイトルは「わたしのせいじゃない」（文：レイフ・クリフチャンソン、絵：ディック・ステンベリ）であった。内容を読んでみて興味が湧いたので、この絵本に決定した。次はこの教材を通して生徒たちにテーマである「いじめ」についてどのように深く考えさせていくか検討するために、何度も何度も絵本を読み返し想像を膨らませた。そこで私が授業展開を考え提案した内容は、生徒が教師役、教師が登場人物（生徒）役を担当するという設定をし、ロールプレイの手法を取り入れることで登場人物たちの気持ちに迫り、対話を重ねながらテーマについて深く考えさせるという授業であった。

○取組内容

①生徒を生活班６班に分け、教師役のリーダーを各班に１名置く。

②各班の教師役が順番に登場人物に質問していき、登場人物（教師）の答えに対して疑問な点があれば問い返していく。そのときに班員で問い返す内容を考えながら進めていく。

③各班が質問した登場人物の答えに対して、疑問に思ったことや考えさせられることがあったらメモしておき、あとで発表する。

・この授業で意識したことは、教師役の生徒の質問に対して生徒役の教師が、いかに真剣に答えるかということであった。そうすることで生徒の感情の中に、「この子が困っているのに何故平気で『わたしにはかんけいない』と言えるのか」とい

う疑問を持たせると同時に、いじめに対する直接的な態度や間接的な態度に対する怒りのような感情が心の内から湧いてくると思ったからであった。その結果、教師役の生徒が「なぜいじめはいけないのか。」と、生徒役の教師に話したり、「わたしにはかんけいない」という言葉にむきになって反論してきたりと、クラス全体が「いじめ＝悪」という雰囲気に変わってきた。「いじめ」というのは当事者だけでなく傍観者も考えなければいけない問題であるということを生徒たちは十分理解したのではないかと考える。

（３）淡路地区教科等指導員（道徳）・道徳教育推進教師として

①淡路地区教科等指導員（道徳）として

平成２８年度から３年間、教科等指導員として淡路島内の小中学校の道徳教育研修会や授業研究会、また、中学校の若手教員研修に出向き、模擬授業や講義を行い道徳の授業実践と普及に取り組んできた。その中で最も意識して取り組んだのが、「対話のある授業」である。１時間の授業の中で、生徒全員が発表する機会を作るとともに、生徒の発言をすべて受容していった。そして、問い返しにより教師と生徒、生徒同士、生徒個人の内面との対話を大切にするとともに、生徒が言いたいことを明らかにしながら道徳的価値に迫っていくことを心掛けた。

・研修テーマ　「対話のある道徳の授業づくり」
・取組　「教材の読み込み方（教材分析シートの活用）」
「発問の組み立て方と問い返しの工夫」
「生徒の考えを深めていくための授業展開の仕方」
「評価をするにあたっての準備と工夫」
「模擬授業を通して、対話のある授業づくりの仕方」

②道徳教育推進教師として

校内道徳教推進のため、まず初めに取り組んだのは教師自身が道徳の授業を楽しめるようにすることであった。「ちょこっと道徳」の取組を提案し、気軽に互いの授業が参観できるように校内における道徳授業研究体制を整えた。また、若手教師とともに和やかな雰囲気の中で模擬授業に取り組むことで、道徳の授業の楽しさを体感させることにつなげた。楽しくなるとさらに研究を進めたくなるものであり、教員間における道徳の授業の高まりに合わせ、講師による模範授業を実施し、講師の問い返しや、生徒からの意見の引き出し方など、道徳の授業のレベルアップを図った。

・研修テーマ　「道徳教育推進の雰囲気づくり」、「授業展開や発問の工夫」
・取組　「講師先生による模範授業」
「若手教師とともに行う模擬授業」
「道徳の校内授業見学（ちょこっと道徳）」

2018年12月13日（木）
（於）大町小

道 徳 教 育 研 修 会

1. 道徳科の目標

・（前略）、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

「一部改正　中学校学習指導要領　第3章　特別の教科　道徳　第1」

○ 道徳性とは

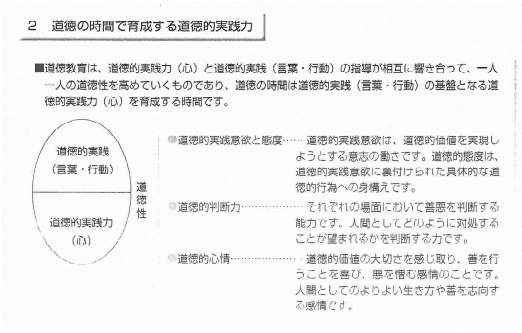
道徳的行為を主体的に実践するための内面的な資質・能力。

↑ よりよい生き方を求めて、よりよい行動をする。

○ 道徳的価値とは

優しさ、思いやり、正直、誠実さ、正義感　など

↑ 内容項目



2. 道徳の授業について

（1）考え・議論する道徳をするためには・・・

※　道徳的諸価値について理解する。（これを基に）

○　自己を見つめる（主体的）

・自分の問題として考える

・当事者になったつもりで心の内を考える

・自らを振り返る

○　物事を多面的・多角的に考える（対話的）

・友だちの意見をよく聞き、自分の考えを語る

・授業者は生徒の意見をよく聞き、意見交流のある授業をする（teach　より　catch）

※多面的とは「親切」にも手助けする行為もあれば突き放す行為もある。このような多様な側面があることを意味する。多角的とは「親切」にするには「勇気」、「善悪の判断」など他の道徳的価値との関係があることを指す。他者と対話したり協働しながら多様な感じ方や考え方に出合い、自分の価値観を高めたり深めたりすることは、生徒一人一人のよりよい生き方に結びつく。

○　人間としての生き方についての考えを深める（深い学び）

・問い返しの重要性（道徳的価値にせまれるように）

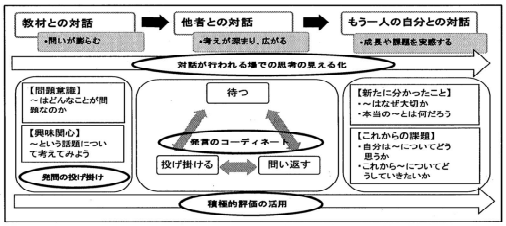
・授業で新しく獲得した価値理解（広がったり深まったり）を基に、自分の生き方を考える。

☆以上のことをする上で大切なこと⇒学級経営の充実

・多様な意見を認め合う雰囲気つくり

・発言する声の大きさ、聞く態度の指導

・共に学ぼうとする教師の姿勢



（2）いい教材　・　資料を読み込む（分析）。

↑　道徳的価値が必ずある。それを構図として読み込む。

・道徳的に変化するもの・・・はしのうえのおおかみ、一冊のノート

・道徳的に変化しないもの・・・偉人伝に多い

（3）中心発問とその問い方が妥当か考える。

↑　教材を読み込むと同時に道徳的価値を理解する。

（4）対話のある授業をしつつ、道徳的価値を考える。

↑これにせまっていく（生徒が考える・生徒がとまどう）◦大切なこと

※道徳の授業は生徒が知っているところからは始まる。

知っている　→　授業を通して　→　理解　・　悟る　・　自覚　・　気づき

↑

生徒が考える授業

※中心発問までの発問は、内容が分かったらいい

↑　話の中身を確認するため

（5）生徒の発言はすべて受容してからいろいろなことを確認する。

※生徒の話をしっかりと聞く。

※生徒が一番言いたいことを復唱する。

↑　言葉がけが大切　・・・「いいね。」「すごいね。」

↑生徒を認めるということになる。

（6）問い返しが大切。（道徳的価値に迫れるように）

・「それってどういうこと」「何がよかったの」「もう少し詳しく教えて」

↑生徒の発言を手掛かりにさらに問うて主題に近づく

これからの授業は

①主体的　・・・　道徳の授業では生徒は主体的に考えている。

②対話的　・・・　教師や生徒同士で対話をしている。

③深い学び　・・・　問い返しが必要。

（7）生徒たちが「気づきが持てる　・　想像できる」ことが大切。

○漠然としていたらどんどん問い返して、その生徒が言いたいことを明らかにする。

（ひょっとしたら違う角度から答えが出てくるかもしれない。）

○周りの生徒もそれに対して気づくことが大切。

※全員が発表する機会を持つことが大切　→　道徳の時間を楽しいものに。

※スピーチよりもキャッチ　←　教えようとしないことが大切。

（8）道徳の授業を楽しむ

○子供と一緒に楽しむ

○子供と語り合い「はっ」とさせられる楽しみ

○授業後の子供の様子から手ごたえを感じ、充実感を味わう楽しみ

（9）考える時間、書く時間を十分に確保する。

（10）基盤は学級経営の充実

★　道徳の時間は考える時間、心の学習をする時間である。

1 ワークシートのよさと活用方法

ワークシートのよさや活用方法としては，次のようなものが考えられよう。

○　書くことによって，児童生徒は自分の考えを整理したり新たな考えに気付いたりすることができ，思考が深まる。（思考の整理・深化）

○　書いたものを児童生徒自身が読み返すことで，自己の成長や課題に気付くことができる。また，それらを教師が読むことによって，児童生徒の考えや成長をみとることができ，評価の資料としても活用できる。（省察・評価）

○　教室や廊下の道徳コーナーの掲示に活用すれば，児童生徒が相互に読み合い，共有したり相互評価し合ったりすることができる。（共有・相互評価）

○　基本的に1時間1枚なので，作成，回収，ファイリングなどが簡易にできる。作成の際には，教材や指導過程に応じてレイアウトを変えたり，イラスト，図，写真などを入れたりするなどの工夫がしやすい。

3.　評価例について

（1）評価の材料

書く（感想）・ 話す（発言）・ 聞く ・ 読む（資料）

↑この4つを合わせて生徒は考えている。

（2）生徒に感想を自由に書かせる。

↑教師は生徒の気づきにアンダーラインを引く ・・・ 生徒と対話をしている

↑教師がコメントを残す ・・・「今日の発言で〇〇はよかったね。」

「友だちの話をしっかりと聞けていたね。」

※生徒の思いが出ているところは逃さない。

（3）生徒の感想の下に以下の項目を足す。

〇よく考えましたか？	大変	全く
〇友だちの意見をよく聞きましたか？	大変	全く
〇何か新しい発見や気づきがありましたか？	大変	全く
〇資料 ・ 教材はどうでしたか？	大変	全く

（4）評価の記述例

資料「〇〇では、積極的に発表することができていました。（意見を聞くとしっかり考えて答えることができていました。発表したことがすごく友だちの刺激になっていました。）

また主人公の〇〇の行動から・・・・・という意見をしっかりと持つことができていました。

そして、今回の授業を通して・・・・・のような行動をしていきたいと考えることができました。

↑　問い返しによりこの意見を引き出すことができた。 ・・・ 適切な問い返しが大切。

道徳の授業では、登場人物のとった行動について自分の考えを積極的に発言する姿勢が見られました。「自分だったら. . . . . 」と考えることで、自分自身を見つめようとする意識が感じられます。

道徳の授業ではあいさつについて、相手の気持ちに立って考えることができました。周りの人と気持ちよく接することの大切さに気づき、自分も実行していこうとする意欲が伺えます。

２　取組の成果

道徳教育推進教師として、「ちょこっと道徳」の取組により、道徳の授業が、教師間の潤滑油の役割となり、職員室において道徳授業や生徒の発言に関する交流が活発に行われるようになってきた。普段の教師間の会話の中に、道徳の授業展開や中心発問、問い返し等授業内容に関すること、生徒の発言や取り組む姿勢に関することなどの会話の増加に比例し、生徒の考えや意見に深まりがみられるようになってきた。さらに、生徒を中心に据えた道徳教育の推進は、生徒指導や生徒理解に充実にも大きな役割を果たしている。

また、教科等指導員として、各校の研究会に参加し、先生方から出される多くの質問から感じたことは、どの学校においても深まりのある授業について多くの悩みを抱えているということであった。しかし、研究会等で出会うごとに、今悩んでいることや生徒が発表したことについて話される内容からは、淡路地区において道徳の授業が着実に深まっていることが感じられた。

３　課題及び今後の取組の方向

日々の授業において、生徒が、「道徳の授業は楽しい」と思えたか、「みんなの意見」を知って共有できたか、「私の意見はこうである」と発言できたか。また、教える教師がが「道徳の授業を教えるのは楽しい」と思えたか、「生徒一人一人の意見」を引き出し認めることができたか。研修後には、生徒同士、生徒と教師が、互いを認め合い受容しながら展開していく授業推進の一助になったのか等々、いつも自問自答をしている。

また、「対話のある授業」を目指すにあたっては、単に自分の意見を述べるだけになってはならない。生徒自身が他の生徒の意見を受容した上で、自分の意見をはっきり述べたり、また、自分の考えを変化させたりと、常に他者との対話、自分との対話を行いながら授業に参加できているかが大切である。

私は、生徒たちが「道徳の授業は楽しい。」と思い、次回の授業はどんなことをするのかという期待感が持てるように。そして、生徒同士が、生徒と教師がお互いに意見を認め合いながら対話のある授業が展開できるように。これらの願いを持ち、私はこれからも日々研究を重ね、気軽に道徳の授業について話し合える雰囲気作りをいつつ、道徳教育の推進に向けて励んでいきたいと考えている。